

## オノマトペと言語の起源

著者	坂本 彩希絵
雑誌名	長崎外大論叢
号	16
ページ	227-236
発行年	2012-12-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1165/00000109/">http://id.nii.ac.jp/1165/00000109/</a>



# オノマトペと言語の起源

坂本 彩希絵

## Onomatopoeia and Origin of Language

SAKAMOTO Sakie

### Abstract

In the history of the Philosophy of Language, onomatopoeia plays an important role. It is not so much treated as a linguistic or grammatical category, but rather as a catchword among so-called language naturalists, who believed that the meaning of words depends on a correlation between their sound and what they denote, and that the sound-meaning relation is not arbitrary. As onomatopoetic words for the most part imitate natural sounds, they are seen as the epitome of how language emerged in the first place, the primary naming of things based on their sounds, i.e. the Adamic language of the Book of Genesis.

My article refers extensively to Plato's *Kratylos*, Böhme's *The Mysterium Magnum*, Leibniz' *New Essays on Human Understanding* and Herder's *Treatise on the Origin of Language*. I intend to demonstrate how onomatopoeia, as a group of linguistic phenomena, is significant also in European philosophy and literary studies.

オノマトペとは物事の声や音、様子や動作、そして感情などを模倣的に表す語の総称であり、古代のギリシア語の *ὄνοματοποιεία* (onomatopoeia) に由来する。ヨーロッパでは古くから広範囲に定着していた用語であり、英語では onomatopoeia、ドイツ語では Onomatopöie と呼ばれる。日本語でもフランス語 (onomatopée) から借入された外来語の「オノマトペ」は、擬声語の意味で用いられる。

このオノマトペはしかし、その原義や論じられる文脈から判断するに、言語学的なカテゴリーのひとつであるのみならず、ヨーロッパの言語を巡る哲学的な議論の歴史の中でも特別な役割を果たした用語のようである。

例えば20世紀後半にイギリスで活躍した一般言語学者 S. ウルマンは、オノマトペを「透明語」と呼んで、その音と意味との間に成立する本質的な対応関係が、言語にある自然的な性格の証左だと言った。<sup>1</sup> ここでウルマンはヨーロッパの言語論史上で最も古い問いを念頭に置いている。すなわち、人間の言語は自然的なものか、それとも恣意的なものかという議論である。<sup>2</sup> もっともウルマン自身も明言しているように、実際にはあらゆる言語に自然的な語と恣意的な語が存在するため、この議論自体は不毛と思われる。しかし、人間の言語はそもそも何に由来するのかという根源的な問いは、プラトンとアリストテレスの時代から現代にいたるまで繰り返され、それぞれの時代の思想や文学に大きな影響を及ぼした。本稿では、プラトン、古代ローマの修辞学者クインティリアヌス、近世ドイツの神秘主義者ヤーコプ・ベーメ、近代ドイツの哲学者ライプニッツ、そしてヘルダーの言語

論を対象に、オノマトペの存在がそのような議論の核心に触れるものであることを示す。

実際の各議論の紹介に移る前に、オノマトペの言語学的な定義および本論での用語法について簡単に説明しておく必要があるだろう。日本語の場合、オノマトペと呼ばれる言語表現は、まず「パシヤン」、「ニャオ」、「ああ」など、物音を単純に言語化したものが挙げられる。品詞的には副詞、あるいは間投詞に分類される。これらはもちろん一定の助詞や動詞などを補うことで、「パシヤンという音」、「ニャオと鳴く」、「ああと叫ぶ」というように他の品詞の転成が可能である。言語によって品詞の転成の法則は異なるものの、オノマトペの中に複数の品詞が含まれる点では共通している。ドイツ語はもともと品詞の区別が厳格な言語であるため、platsch (パシヤン)、miau (ニャオ) は間投詞に分類され、これに-en を付ければ動詞 platschen、miauen、それを更に (das) Platschen、(das) Miau と綴れば名詞となるが、一方で、英語の場合、splash は「パシヤン」という水音を表わす名詞であり、また同時にそのような音を立てて水を飛び散らすという意味の動詞でもある。これを副詞化すると splashily となる。英語で猫の鳴き声を表わす miaow も名詞兼動詞である。ドイツ語や英語の場合、Platschregen ([独] にわか雨)、platschnass ([独] びしょびしょの)、splashback ([英] はね水よけ)、splashdown ([英] 着水) というように、他の語との複合でできる語もやはりオノマトペの範疇に含まれる。本稿では、以上のような擬声語を品詞の別を問わず、一貫して「オノマトペ」と呼び、またその際、取り上げる文献の成立時代も問わない。というのは、これから扱う文献の大部分は、「オノマトペ」が現在の「擬声語」という意味を獲得する前の時代のものであるからだが、そのような古い定義を指す場合は「オノマトポエシア」と呼ぶことにする。

## 1. 原義

古代ギリシア語の ὀνοματοποιία は擬声語という意味ではなかった。ὄνομα (onoma) は本来「語」あるいは「名」を意味し、また ποιεῖν (poiein) は「つくる」あるいは「詩作する」という意味である。つまり原義の ὀνοματοποιία は「語を造ること」あるいは「名づけ」を意味したのである。ドイツ語でも長い間この意味で用いられていた。18世紀にライプツィヒの書籍商ツェードラーが出版した『学術・芸術大百科事典』の、「オノマトポエシア (ONOMATOPOEIA)」という見出しの下には、「まだ名を持たない事物のために相応しい名を案出すること」という記述しか見られない。<sup>3</sup> 「響きの模倣、音の模写、自然の音や事物の音に似せて語を造ること」という記述が現われるのは、ようやく19世紀の半ばになってからであり、<sup>4</sup> こちらの意味は同世紀後半から20世紀初頭にかけて、最終的に定着する。<sup>5</sup> 「名づけ」から擬声語へと定義が大きく変わったように見えるかもしれないが、実はそれほど突飛な変化ではない。なぜなら、そもそも古代ギリシアの ὀνοματοποιεῖν、つまり「名づけること」の前提が、自然界の事物の音声による模倣だったからである。

### (a) 古代ギリシアのオノマトポエシア

音声で事物の本質を模倣することが、すなわち正しい「名づけ」であるという主張は、紀元前4世紀のアカデメイア派の言語論に現われる。<sup>6</sup> 「オノマ」(421)、つまり「名」の正しさをテーマにしたプラトンの対話篇『クラテュロス』において、<sup>7</sup> 主人公であるソクラテスは、人間が事物を指し示すときは、その様子を模倣する以外にないという前提から、「名とは模倣される対象の音声による模造品」(422B)であり、事物の「有りがた」を「文字と綴りで模倣することができるならば」、人

間は「それぞれのものが正にそれで有るところのものを表わすことになる」(423E)と言う。そしてソクラテスは次々に具体的な語を挙げて自らの主張の裏付けを試みる。例えば、

r (ロー) の字は〔中略〕運動を模倣するにはかっこうの道具であると、名前を定めた人には思えたのだね。とにかく彼はこの字母を、運動を表わすためにたびたび使っているよ。まず第一に rhein (流れる) と rhoē (流れ) の場合からして、彼はこの文字によって運動を模倣しているし、次に tromos (震え、揺れ) において、次に trachys (ぎざぎざの、粗い) において、更にまた次のような述べ言葉においてね。例えば krouein (たたく)、thrauein (砕く)、ereikein (裂く)、thryptein (こなごなにする)、kermatizein (寸断する)、rhythmein (旋回する) などだ。すべてこれらのことがらを命名者は主として r の字によって再現しているのだ。なぜなら彼は、僕の思うに、r の字の発音に際して舌が静止することの最も少なく、震動することの最も多いのを見て取ったからなのだよ。それだからこそ彼は、これらのことを表わすのに、この字母をしきりに用いているのだと、僕には思えるね。(426C-E)

事物の名がそもそもどのようにして与えられたかという問題について、ソクラテスは、発音時の舌の動きや唇の形、そして氣息など、それぞれ特性を持つ各字母が、事物の本質に則して割り当てられたのではないかと推論する。これがいわゆる言語自然論の嚆矢であり、この立場によれば、あらゆる名は模倣という関係によって自然と繋がっていることになる。

もっとも『クラテュロス』のソクラテスが考える字母の音と名との関係は、後世の擬声語としてのオノマトペと同じではない。ソクラテスの関心は字母一つ一つの特性と指示対象の本質との対照にあり、これは、一つの名全体の音声によって事物を模倣するオノマトペとは厳密には異なっている。しかしながら、事物の本質を音で模倣するという発想自体は擬声語と同じであり、従って、名づけと擬声語の類縁関係、つまりオノマトポエシアとオノマトペの関係は、西洋の言語観において非常に古く、また本来的に認められていたものだと見て間違いはない。ちなみに、ソクラテスによれば、事物の本質を見極め、それに適当な音を割り当てるのは、誰にでもできる芸当ではなく、「命名者」にはそのための特別な洞察力が必要となる。<sup>8</sup> このような、名の正しさを保証しうる命名者というイメージは、近代初期の議論にも見出される。ツェードラーの百科事典においても前掲の記述の後に、「名を案出すること」が「日々何か新しいものを発見する芸術家や科学者に許された行為である」という解説が続く。

#### (b) 古代修辞学のオノマトポエシア

アカデメシア派の哲学において、オノマトポエシアが言語自然論の中核をなした一方で、古代ギリシアおよびローマの修辞学では、それは音形象の範疇で扱われた。音形象とは聴覚に訴える修辞技巧の総称であり、オノマトポエシアの他には各種の押韻、音調、音声的類語、感動詞、掛詞、反復などを含む。ただし、オノマトポエシアの技巧はここでもやはり、擬音語を用いることではなく、むしろ効果的に音を模倣して新たな語を生み出すことを指した。

1世紀の古代ローマで活躍し、ヨーロッパの中世やルネサンス期の修辞学にも影響を及ぼした修辞学者クインティリアヌスの、現存する唯一の著作でもある『弁論家の教育』<sup>9</sup>には、オノマトポエ

アに関して以下のような記述がある。

オノマトポエシア、つまり新たな名を造り出すこと、ギリシア人が最も美しい表現に数え入れたこの技は、我々ローマ人には今日ほとんど許されていない。最初に言葉を創った者たち〔ローマ人〕も語を感情の印象に合わせたが、大抵のものはそのようにして既に最初期に定められてしまっている。mugitus〔咆哮〕、sibilus〔シュー〕、そしてmurmur〔ぶつぶつ〕はそのようにして生まれたのだ。(VIII, 6-31, [ ]内は引用者)

ここで挙がっているオノマトポエシアの例は、プラトンの場合とは異なり、明らかに擬音語であるが、しかし、クインティリアヌスが問題にしているのもまた「新しい名を造り出すこと」である。音形象の一種としてのオノマトペは「感情の印象に合わせ」て新たな「名づけ」を行うことなのだ。クインティリアヌスはどうか、後世になればなるほど、名の与えられていない事物は少なくなると考えたらしく、自分の時代にはもはや、その先祖やギリシア人と比べて、オノマトポエシアを使う余地がないと思っていたようだ。

1世紀当時のローマ人に既にオノマトペによる表現の美しさは拒まれているというクインティリアヌスの悲観的な考察が、正しかったかどうかは定かではないが、少なくともこのオノマトポエシアという技法は、そのままの定義で中世およびルネサンスにも受け継がれた。例えばエラスムスが1512年に著した修辞学の解説書『コピア』でも、オノマトポエシアはやはり古代ローマの修辞学におけるのと同様の意味で、「新たな語を造り出すこと」として紹介されている。<sup>10</sup>

## 2. 原言語とオノマトペ

「名付け」はキリスト教世界において特別な意味を持つ行為である。というのは、旧約聖書においては被造物は全て神の命を受けた最初の人間アダムによって名づけられたとされ、アダムが最初に発したそれらの言葉は、被造物の本質の認識に基づく理想の言語と考えられたからである。人間の最初の言葉をめぐるとこの神学的認識は、近世神秘思想の中で新たにされ、その後数世紀に亘る言語の起源についての議論において幾重にもパラフレーズされた。その中で、オノマトペもまた重要な役割を演じることになる。

### (a) ヤーコブ・ベーメの「自然の言語」

他の時代の言語自然論者と同様に、近世のキリスト教系の神秘思想家たちもまた、理想の言語は事物の本質を捉えるものと考えた。この時代のドイツの神秘主義を代表する思想家ヤーコブ・ベーメが著書『シグナトゥーラ・レーラム〔万物のしるし〕』(1622)や『大いなる神秘』(1623)において唱えた「自然の言語」という理念は有名である。<sup>11</sup> 万物の根底に神の無限の霊力が秘められていると考えたベーメは、更に万物は自らの霊的本質を語り出していると考えた。

自然は万物に、その本質と形式に応じて言語を与えた。すなわち本質から言語ないし音は生じる。

〔中略〕／万物には表出のための口がある。そしてこれが、万物が自らの属性を語る場所の自然の言語であり、絶え間なく現われ、言明し、自身が何のためになり、何に益するかを明かす。



(SR1-16, 17)

「自然の言語」とはすなわち、万物の本質の響きである。この言語は実際の社会で私たちが使っている事物の名とは違い、それぞれの事物に対して唯一無二のものであり、全ての民族に同じように響く。この言語において様々な民族が、人外の動物さえも含めて、種族の違いを越えて理解しあうことができるとされる。<sup>12</sup> あらゆる宗教や神秘思想を一つの真理のもとに統合しようとするベーメの神智学的探究に相応しい理念だとも言えるだろう。

ベーメの「自然の言語」は『大いなる神秘』の中で再び論じられ、旧約聖書の世界でアダムが話した言語に比定されることによって後世に多大な影響を与えた。

今や明らかにアダムは神の化身となる。獣ではない。というのも、アダムは全ての被造物の属性を知り、全ての被造物にそれらの本質、形式、そして属性に基づいて名を与えるからである。彼は自然の言語を理解していた。すなわち、万物の本質において顕現し、また形を成している語を。というのも、あらゆる被造物の名はそこから生じたのだから。(MM22)

ここでベーメが指示しているのは、旧約聖書『創世記』第2章第19節に記されているアダムによる被造物の名付けの場面である。

主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のもとへともたらし、人がそれぞれをどう名づけるか見ておられた。そしてそれぞれの生けるものたちは、人が名づけるまさにそのように名乗ることとなった。<sup>13</sup>

アダムが神の意志に基づいて被造物に与えた名は、人間が最初に発した言葉であるとともに、天地創造の際に神が行った「名づけ」を受け継ぐものである。<sup>14</sup> 神の代理人としてのアダムの姿とその言葉の神性は明らかだ。「神の化身」としてアダムが創始した言語は、その後、バベルの塔の建設に怒った神が、言語を乱してしまうまで、人間の唯一の言語であったという。

ベーメはこの『創世記』の故事に自らの理想の言語を重ねあわせる。ベーメ曰く、アダムは生き物たちを適当に名づけたのではなく、「それらの本質、形式、そして属性」、すなわち「自然の言語」に基づいて名を与えた。そしてその言語は「音」としてイメージされている。ベーメの「自然の言語」にオノマトペは直接関係しないが、古人がオノマトポエイアと呼んだ真正の「名づけ」が、やはり音に由来することは、その後に盛んになった言語の起源をめぐる議論との関係において見過ごすことはできない。

#### (b) ライプニッツの「原言語」

ベーメが唱えた「自然の言語」は、神秘主義的な発想であるにも拘わらず、後世にも理解された。およそ百年後のドイツの哲学者ゴットフリート・ライプニッツも支持者の一人である。ライプニッツは『人間知性新論』(1704)の中で、人間の言葉について以下のように言う。<sup>15</sup>

あらゆる民族が共通の起源をもち、ひとつの根源的な原言語があるという見解と対立したり、あるいはそれを支持しなかったりすることに根拠はありません。ヘブライ語やアラビア語はそのような原言語に最も近いのですが、もはや大きく変わってしまったに違いありません。ですがドイツ語はもっと根源的なもの、(ヤーコプ・ペーメの言葉でいえば) アダム的なものを保持してきたように思われます。

ライプニッツのドイツ語に対する言語ナショナリズム的な見解はともかくとして、彼がここで、ペーメの神秘主義的な言語観を反復し、人類に共通の根源的な言語の存在を認めているのがわかる。ちなみに、ライプニッツの思想体系に照らして言えば、この「原言語」は、人間が絶対者の内にある観念に与かるのに必要とされる普遍言語に相当する。ライプニッツ曰く、神ならぬ人間の知性には限界があり、事象の全体を一挙に直観することはできないが、それでも言語を用いて論理的に把握し、不断に認識を更新することはできる。人間の認識は絶対者の観念に対して類比関係(アナロギア)にあり、そのような関係において機能する人間本来の言語は、当然全人類に普遍的なものでなければならない。もっとも、ライプニッツの企図は旧約世界への回帰にではなく、人間の認識がより完成へと近づくために不可欠な、純粋な理想としての普遍言語の再構築にあるのだが、それは、実際に話されている各言語の語の中に保存された原初性に、普遍性を見出すことを排除するものではない。つまり、ライプニッツは『創世記』に記されたアダムの言語を、今は失われた理想の言語とみなし、その痕跡をドイツ語の中に探そうとしているのである。

ライプニッツはアダムの言語の痕跡を自然と語の音との類似に見出す。

もし私たちが根源的な言語を純粋に、あるいはそれと再認識しうるような状態で保持してきたのだとすれば、連結の根拠がその中にはっきりと現われるに違いありません。それが自然に由来するものであれ、恣意的な、しかし原初の創始者の業に相応しい賢い設定に由来するものであれ。私たちの諸言語が派生的なものだと仮定しても、それにも拘わらず、やはりその根底には何か根源的なものが、つまり根源語との関係において〔中略〕生じたものがあるのです。動物の鳴き声を意味する言葉やそれに由来する言葉が、その例として挙げられます。たとえば、蛙について言うところの *coaxare* (ケロケロと鳴く) というラテン語は、*Quaken* というドイツ語と関係があります。

ライプニッツ曰く、語と事物との連関が類推されることが、その語の純粋さと原初性の証である。ゆえに、動物の鳴き声の模倣がその恰好の例となるのは必然であろう。模倣はそもそもライプニッツの思想の根本原理であるアナロギアに通じ、その点でもやはり、模倣がこの「原言語」という理念の第一の要件であるとみて間違いない。特に、ラテン語にもほぼ同音同意の語が存在する *Quaken* は、更にその派生語の網が英語まで広がっているという事実とも相まって、普遍性をも看取させる。しかも、このモデルであれば、言語は自然的であるか、それとも恣意的であるかという伝統的な対立も解消される。なぜなら「原言語」はアダム的な「原初の創始者」によって「恣意的」に、しかし自然とのアナロギアにおいて生み出されたものだからだ。

このように、ライプニッツの言語観において、オノマトペはまさに中核をなす。もっとも、ライブ

ニッツ自身は Quaken を擬声語という意味で「オノマトペ」とは呼ばなかったのかもしれない。彼の生きた18世紀初頭では、「オノマトペ」はまだ修辞学的な用語であった可能性が高いからである。しかしながら、ライプニッツはベーメのアダム言語を意識することで、オノマトポエイアとオノマトペを架橋する。すなわち、最初の人間による「名づけ」、つまり言語の起源は、明らかに擬声語としてイメージされるのである。<sup>16</sup>

### (c) ヘルダーの『言語起源論』

ライプニッツの『人間知性新論』からおおよそ70年後、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーは『言語起源論』(1772)<sup>17</sup>の中で、人間が最初に事物に与えた名をやはりオノマトペに帰する。

ベーメと同様に、言語の要素となる「最初のしるし」は自然界から得られると考えたヘルダーは、視覚、触覚、聴覚のうち、聴覚こそその「しるし」の把握に最も適しているという。視覚は一挙に多くの「しるし」を捉えすぎるため、個物の言語化には不向きであり、また触覚にもやはりあまりに多種多様な印象が入り乱れており、言葉には結びつきがたい。

しかし耳を傾けよ！ 羊がメューと鳴く！ すると、ほとんどのものが分かちがたく一体化している色彩画のキャンバスから、一つの徴が自ずから飛び出し、深く、そしてはっきりと魂に入り込んでしまう。「ああ！」と、この学びの徒は〔中略〕言う。「私にはもうおまえがそれだと見分けることができるぞ。——お前はメューだ！」 コキジバトはクークー、犬はワンワン！ かくて三つの語がある。〔中略〕自然はこの徴を単に響き出させるだけでなく、深く魂へと入り込ませる！ 響く！ 魂は掴み取ろうとする——かくて自然は「響く語」を得る！ (158)

自然界の事物が立てる音は、個別的なものとして人間の聴覚によって把握されうる。人間は羊の声、鳩の声、そして犬の声をそれぞれ聞き分けることができ、それによってはじめて事物の明確な認識が可能になる。人間の最初の言葉は、そのような認識の証として、人間が発した模倣音である。

木の葉がざわめいて、この哀れで孤独な者に涼をとらせるとき、さらさらと流れゆく小川がその者を寝かしつけ、そしてその頬がざわめき寄せる西風にそよぐとき——メューと鳴く羊が彼に乳を与え、ちょろちょろと湧く泉が水を、ざわめく木が木の実を与えるとき——それら有益な存在を「認識しよう」という関心は十分であり、目や舌がなくてもそれらを魂において「名づけよう」という欲求は十分である。木はざわざわ、西風はそよそよ、泉はちょろちょろという名になるであろう。(159)

人間に本来的に備わるとされる認識への欲求が初めて認識の対象と出会って生まれた言葉、いわば最も新鮮で原理的な言葉は、上掲のライプニッツと同様、ヘルダーによってもオノマトペとしてイメージされている。

ヘルダーはまた、例のアダム言語にも言及するが、しかしそれには独自の解釈がなされており、かつてのベーメのそれとは方向が違う。



私は問う。「まさしく悟性が、人間がそれによって自然を支配しているところのものが、生ける言語の父だったのであり、悟性は判別のためのしるしとして、鳴り響くものの音からその言語を抽出したのだ」というこの真理が、この歴然たる真理が、オリエン的な表現で、これ以上に高貴に、そして美しく言われうるであろうかと。すなわち「神は動物を彼の者〔アダム〕のもとに導かれ、そして彼の者が動物たちを何と名づけるかをご覧になる。そして彼の者が動物を名づけるように、動物は名乗ることになろう！」オリエン的な、そして詩的な表現で、これ以上一体どこではっきりと言われうるであろう。人間が自らのために言語を発明したのだ！——生ける自然の音から！——その支配的悟性のためのしるしとして！——以上が私の証明することである。（159,〔 〕内は引用者）

元来の「アダムの言語」が神によって授けられたものであり、またそもそもアダム自身が神的存在であるのに対して、ヘルダーにおけるアダムは独り立ちした悟性的存在であるように見える。<sup>18</sup> 人間の言語の父は今や神ではなく「悟性」なのだ。すなわち、近代科学の時代の思想家に相応しく、神学的世界像を離脱したヘルダーにとって、人間が人間としてあることを保証するものはその悟性以外にない。『創世記』におけるアダムの名付けの場面は、神による世界の創造の一環ではもはやなく、人間が自然界の様々な「しるし」を悟性によって認識し、言語化できる存在であることの「詩的な」——比喩的な——証となり、そして「メュー」、「ざわざわ」、「ちょろちょろ」のようなオノマトペは、まさにその人間性の最初の発露として、「全世界の音からなる最初の辞典」(160)<sup>19</sup>に書き込まれるのである。

### 3. 結論と課題

古代から近代にいたるまで多くの思想家がオノマトペについて論じている。それぞれがどのような思想的背景から論じているにせよ、オノマトペは常に言葉と自然との関係で問題になる。プラトンにおいてもクインティリアヌスにおいても、語と指示対象の自然的本質との一致が論じられるとき、対象の様態を音で模倣することが注目される。近世のペーメの神秘主義的な「自然の言語」およびアダムの言語という理念も、そしてその影響を少なからず受けたライプニッツとヘルダーの言語論も、模倣音としてのオノマトペに、人間の言語が自然の所産である証拠を読み解こうとした。

人間の言語が自然に由来するかどうかは、詩人にとっても重要な問題だったはずである。実際にオノマトペが使われている詩作品は時代を問わず多い。修辞学の伝統に基づいた表現が盛んだった時代には、音形象の一つであったオノマトペが盛んに使われていても不思議ではないが、更に後の時代の、ティークやブレンターノ、そしてアイヒェンドルフといったドイツ・ロマン派の詩人の作品においても、オノマトペは頻繁に登場する。それらの具体例に目を配り、擬音語に関するロマン派の詩学が、同時代に活躍したヘルダーの言語起源論や類似の議論と、どのような影響関係にあるかを探るのが今後の課題の一つである。

言語の起源をめぐる議論は、19世紀に入ると急速に下火になる。言語起源論の思弁性は当時の実証主義的言語学とは相いれず、1865年にはパリ言語学会が、この種のテーマに関する研究発表を正式に禁止するに至った。とりわけソシュールの言語相対論的言語学が登場して以降は、言語は各民族によって異なる恣意的な体系であるという認識が一般的にも浸透した。ちなみに、ソシュールはオノマトペ

という必ずしも恣意的な記号とは言えない一群の語があることは認めていたが、それを例外と見なし、深く考察しようとしなかったという。その一方で、19世紀後半から20世紀初頭の文学潮流においては、フーゴ・バルやクルト・シュヴィッターズらによって、言語の恣意性のみならず、言語の意味作用さえ否定する抽象的音響詩が作られ、それによって再びオノマトペが脚光を浴びることになる。<sup>20</sup> 今後のもう一つの課題として、前衛芸術的な音響詩をその前史後史、および同時代的反響も含めて考察したいと考えている。

また本稿では、ドイツ語圏の文献の考察が大部分を占めることになったが、本来は他のヨーロッパ語圏の動向も探る必要がある。上掲のライブニッツはドイツ語こそ「原言語」の痕跡を最も残していると考え、擬声語に着目したが、しかし、ロマンス語圏においても1808年にノディエによる『理論フランス語擬声語辞書』が出版されたように、<sup>21</sup> オノマトペをめぐる議論がヨーロッパ中に広がっていることは疑いえない。ドイツ語圏以外の議論にも目を配ることもまた今後の課題である。

## 注

- <sup>1</sup> Ullmann, p. 81.
- <sup>2</sup> ウルマンはそれぞれの説の論者を「自然論者」(the naturalist)、「慣習論者」(the conventionalist)と呼んでいる。Ullmann, p. 80. ソシュール以降の言語学では、言語(記号)の意味と音声との間に必然的な結びつきが存在しないこと、個々の語の意味はその言語体系内における他の語との関係から決定されること、言語体系の内的構成は人間の動物的本能図式には基づいていないことの三点は、言語の恣意性(fr. arbitraire, en. arbitrariness, dt. Arbitrarität)と呼ばれる。これに対して、情動語論や模倣説などにおいては、意味と音との間の本質的な対応、すなわち言語の自然的な特性が追及される。本稿が重点的に論じている言語起源論は自然論を代表する仮説である。もっとも、そのような自然論はやはり仮説の域を出ず、ソシュール以降は顧みられることが多くはない。しかしながら、20世紀に入ってから、K. ビューラーやE. コセリウなどは、言語心理学あるいは音韻論的な観点から、言語の自然性について言及し、その文脈においてはオノマトペが頻繁に取り上げられる。Trabant, S. 130 u. 137. を参照。
- <sup>3</sup> Zedler, S. 1477f.
- <sup>4</sup> Heyse, S. 558. しかし未だ第二義としてであり、やはり「名づけ」が第一義である。
- <sup>5</sup> 「音の模倣、音画。【稀】語を造ること。」Sanders, S. 131. ハイゼの『外来語辞典』でも1903年版において、それまでは筆頭の語義であった「名および語を造ること」が消え、「音の模倣」の意味が前面に押し出される。Heyse, S. 529f. を参照。
- <sup>6</sup> もっとも、この一派の言語論の中心は、名はそもそもその正しさを論じることができるものなのかという点にある。以下に挙げる『クラテュロス』でも、前半では名の恣意性を主張するヘルモゲネスに反駁するため、ソクラテスは字母の音を根拠にその正しさを主張するが、後半では逆に、事物の名は原則的に正しくその本質を捉えていると主張するクラテュロスが論戦相手になるため、ソクラテスは翻ってその恣意性を主張する。また、プラトンの弟子であるアリストテレスは名辞と意味との関係を「設定」(thesei)、つまり人間の恣意であると考え、名の真偽を問う議論そのものを斥けた。
- <sup>7</sup> 引用は日本語訳の凡例に従って、ステファヌス版(H. Stephanus, Platonis opera quae extant omnia, 1578)のページ数とABCDE段落数を引用末尾に記す(参考文献表を参照)。
- <sup>8</sup> プラトン、390D-E。
- <sup>9</sup> Quintilianus, S. 231.
- <sup>10</sup> Kayser, S. 98 u. 101.
- <sup>11</sup> ヤーコブ・バーメの著作からの引用は日本語訳を参照しつつドイツ語の現代語訳版から訳出した(参考文献表を参照)。尚、引用に関しては日本語訳の凡例に従って、『シグナトゥーラ・レールム』はSR、『大いなる神秘』はMMとした上で、章ないし節の番号を記す。
- <sup>12</sup> 『キリスト教神秘主義著作集13』、CXXIX頁。
- <sup>13</sup> 旧約聖書からの引用は日本聖書協会の新共同訳を参照しつつ、ドイツ語のルター訳聖書から訳出した(参考文献表を参照)。
- <sup>14</sup> 『創世記』第1章第5-10節。
- <sup>15</sup> この著作からの引用は日本語訳を参照しつつ(参考文献表を参照)、ドイツ語訳から訳出した。Leibniz, S. 279. ライブニッツ、22-24頁。
- <sup>16</sup> ライブニッツは別の個所でも「少しずつ形成された言語において、言葉は折々に、事物の知覚に伴う精神の性情と音声との類比から生じた。アダムは他のいかなる仕方でも名を与えなかつたらう、と私は思っている」と述べている。ライブニッツ、25頁、注54。
- <sup>17</sup> この著作からの引用は日本語訳を参照しつつ訳出した(参考文献表を参照)。ページ数は引用末尾に記す。
- <sup>18</sup> ヘルダーは人間が人間である所以をその「意識性」に求める。「意識性」とは端的に言って人間の認識能力のことであり、押し寄せるさまざまなイメージを個別に捉える能力を意味する。ここで言われている「悟性」もまた意識性の一環であり、

- とりわけ認識を言語へと繋げる能力と考えられる。ヘルダー、183頁を参照。
- <sup>19</sup> 人間が持ったであろう最初の語彙群の比喩。
- <sup>20</sup> 例えばバルの“KARAWANE” (1917) が有名である。“jolifanto bambla o falli bambla / großiga m'pfa habla horem / egiga goramen / higo bloiko russula huju / hollaka hollal / anlogo bung / blago bung / blago bung / bosso fataka/ü üü ü / schampa wulla wussa olobo / hej tatta gorem / eschige zunbada / wulubu ssubudu uluwu ssubudu / tumba ba-umf / kusagauma / ba-umf” この詩ではどの語も意味を持たない。
- <sup>21</sup> Ullmann, p. 80.

## 参考文献

### 欧文

- Böhme, Jakob, *Sämtliche Schriften*, Faksimile-Neudruck der Ausgabe von 1730 in elf Bänden, Stuttgart 1955-58.
- Herder, Johann Gottfried, *Abhandlung über den Ursprung der Sprache*, In: Peter Müller (hrsg.): Sturm und Drang, Weltanschauliche und ästhetische Schriften. 1, Berlin & Weimar 1978, S. 157-186.
- Heyse, Johann Christian August, *Allgemeines verdeutschendes und erklärendes Fremdwörterbuch*, 10. Aufl., Hannover 1848.
- Heyse, J. Ch. A., *Allgemeines verdeutschendes und erklärendes Fremdwörterbuch*, 21. Aufl., Berlin 1903.
- Kayser, Wolfgang, *Die Klangmalerei bei Hansdörffer*, Göttingen 1962.
- Leibniz, Gottfried Wilhelm, *Neue Abhandlungen über den menschlichen Verstand*, 2. Aufl., Leipzig 1904.
- Luther, Martin (übers.), *Die Bibel*, rev. Aufl., Stuttgart 1984/2005.
- Quintilianus, Marcus Fabius, *Ausbildung des Redners*, Hrsg. u. übers. von Helmut Rahn, Darmstadt 2011.
- Sanders, Daniel, *Fremdwörterbuch*, Leipzig 1871.
- Ullmann, Stephen, *Semantics an Introduction to the Science of Meaning*, Oxford 1977.
- Zedler (hrsg.), Johann Heinrich, *Grossen vollständigen Universal-Lexikons*, 2. vollständiger photomechanischer Nachdruck, 25, Graz 1993-.

### 和文

- 新共同訳『聖書』、日本聖書協会、2011年。
- 南原実訳『キリスト教神秘主義著作集13 ヤーコブ・ベーメ』、教文館、1989年。
- プラトン『クラテュロス——名の正しさについて』、水地宗明訳、岩波書店、1974年。
- J. G. ヘルダー『言語起源論』、大阪大学ドイツ近代文学研究会訳、法政大学出版局、1972年。
- ゴットフリート・ライプニッツ『ライプニッツ著作集5』、谷川多佳子他訳、工作舎、1995年。